

【環境生活部長賞】

街を育む水の流れ

仙台市立第一中学校

三年 三浦 叡

私の住む街、仙台。伊達政宗が居を構えた青葉山から城下を見下ろせば、豊かな自然に囲まれた人々の営みが広がっています。どこまでも澄んだ広瀬川。青々と茂る木々。高層ビルが立ち並ぶ中心部。都市と自然が溶け合う「杜の都」の街並みです。とりわけ、定禅寺通や青葉通のケヤキ並木はその象徴であり、地域の誇りです。

けれども、私たちが「杜の都」と呼ぶ街並みの多くは、第二次世界大戦からの復興の過程において造られたものであり、それ以前の「杜の都」の姿は、現在とは大きく異なっているものだったそうです。

「では、その昔、この仙台城からはどのような街並みが見えたのだろう。」疑問に思い調べていくうちに、江戸時代の街づくりにおいて、水がいかに大きな役割を果たしてきたかを知ることができました。そして、私が通う中学校の周辺にも、その痕跡が残っていることを知ったのです。

中学校の西側に、大崎八幡宮という大きな神社があります。その入口には「太鼓橋」と呼ばれる石造りの橋がかかっています。橋の下はコンクリートで覆われ、水のせせらぎに耳を傾けることはできません。ところが、このコンクリートの下には、現在もとうとうと水が流れているのです。そして、この流れこそ、仙台の街づくりには欠かすことのできない清らかな水を下流に供給し、「杜の都」の礎となった四ツ谷用水なのです。

四ツ谷用水は、今から約四〇〇年前、伊達政宗の命により着工し、第四代藩主の伊達綱村の時代にはほぼ完成したと考えられています。市の中心部から西へ約四kmの広瀬川上流部に堰を設け、流れを遮る山にはトンネルを掘り、深い谷には木製の樋をかけることにより、城下に豊富な水を供給し

ました。その水は生活用水や産業用水、防火用水など幅広い分野で使われ、仙台の人々の生活を根底から支えていました。四ツ谷用水は、いくつかの支流に分かれながら城下を潤し、その総延長は約四四km、あるいは六〇kmに及んだとも言われています。限られた技術をもとに、これだけの水路を整備した先人の苦勞と努力に、私は大きな驚きを覚えました。「太鼓橋」から住宅地を縫うように佇むコンクリートにさえ、当時の人々の喜びが感じられます。

さらに、四ツ谷用水は、仙台藩の人々が目にしたであろう街の姿を形作る上でも重要な役割を果たしていました。流れる水の一部は地下に浸透し、井戸の水位を押し上げることで、飲料水の確保を容易にしました。それだけでなく、城下に広がる屋敷林の成長を促し、緑豊かな街並みの形成に大きく貢献することとなったのです。今は見ることでできない、かつての「杜の都」。そこには、四ツ谷用水の存在が不可欠であり、また四ツ谷用水があったからこそ、いつしか仙台は「杜の都」と呼ばれることになったのだと思います。そして、その水は、今もお工業用水として宮城県内の多くの企業に利用されています。長い時を超え、暮らしを支え続ける四ツ谷用水に、私は感謝の気持ちで一杯です。

明治時代以降、維持管理が十分に行われなくなったこともあり、下水道の工事とあわせて四ツ谷用水は私たちの目の前から姿を消し、現在は各地に点在する遺構が往年の面影を留めるのみとなっています。一方、人々の間では、仙台の繁栄の礎を忘れてはいけな이의思いのもと、その価値を見直す動きが広がっています。私も、四ツ谷用水の果たした役割を後世に伝え、地域の宝として受け継いでいくことは、とても大切なことだと思えます。一人一人の小さな思いが大きな流れとなり、人と自然が共存する「杜の都」の美しい街並みが永遠に続くことを、私は願っています。